

日置市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

たれくちいせき  
垂口遺跡

畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年 3月

鹿児島県日置市教育委員会



日置市埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

たれくちいせき  
垂口遺跡

畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年 3月

鹿児島県日置市教育委員会





卷頭図版



## 序 文

本書は、畑地帯総合整備事業（吉利地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査の結果をまとめたものです。

垂口遺跡は、平成7年分布調査で発見されました。平成24・29年には、事業対象地内に所在する同遺跡の範囲や時代等を把握する目的で、確認調査が行われました。その際、遺跡の北側で縄文時代早期（今から約9,000年前）の土器が出土しました。今回の発掘調査では、縄文時代後・晩期（今から約4,000・2,500年前）や古墳時代（今から約1,500年前）の土器が出土しました。また、石鏃、籾の羽口や鉄滓等が出土し、柱穴跡も検出されました。日吉地域で本格的な発掘調査が行われたのは、僅か2遺跡なので、今回新しい資料が加わることは大変貴重なことといえます。

この報告書が、地域の歴史解明の一助となり、市民の方々の文化財保護への御理解が深まるようお願いしております。なお、発掘調査から報告書の発刊に至るまで、関係者の方々に多くの御協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

令和2年3月

日置市教育委員会

教育長 奥善一

## 例 言

1. 本報告書は、日置市教育委員会が令和元年に実施した、畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、鹿児島県日置市日吉町吉利に所在する。
3. 本遺跡の発掘調査、報告書作成は日置市教育委員会の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所が行った。
4. 遺物番号は通し番号とし、本文及び挿図、図版の番号とは一致する。
5. 挿図の縮尺は各図面に示している。
6. 本書で用いたレベル数値は全て海拔絶対高である。
7. 本書で使用した方位は平面直角座標上の北である。
8. 本書執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅱ章	西久保淳美（日置市教育委員会社会教育課）
第Ⅲ章	野田千輝（株式会社九州文化財総合研究所）
第Ⅳ章	大谷伸宏（株式会社九州文化財総合研究所）
第Ⅴ章	森 将志・鈴木 茂（株式会社パレオ・ラボ）
第Ⅵ章	西久保 大谷・野田・権藤奈緒美（株式会社九州文化財総合研究所）

9. 遺物は日置市教育委員会にて保管し、展示・活用する予定である。

# 目 次

・巻頭図版	
・序文	
・例言	
・目次	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の概要	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序	6
第Ⅳ章 調査の成果	10
第Ⅴ章 自然科学分析	17
第Ⅵ章 まとめ	19

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000) .....	4
第2図	基本層序図 (S=1/20) .....	6
第3図	調査区配置図 (S=1/1,000) .....	7
第4図	北壁土層断面図 (S=1/40) .....	8
第5図	西壁土層断面図 (S=1/40) .....	9
第6図	VI層遺物分布図 (S=1/150) .....	11
第7図	Va・b層遺構配置・遺物分布図 (S=1/100) .....	12
第8図	遺構断面図① (S=1/40) .....	13
第9図	遺構断面図② (S=1/40) .....	14
第10図	出土遺物実測図 (土器・陶磁器) (S=1/2) .....	15
第11図	出土遺物実測図 (石器・鍛冶関連遺物) (S=1/1・1/2・1/3) .....	16

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表 .....	5
第2表	遺物観察表 .....	20

## 写真図版目次

巻頭図版		
調査区全景 .....		21
土層断面 .....		22
遺物出土状況／遺構検出状況／完掘状況 .....		23
出土遺物 (土器・陶磁器) .....		24
出土遺物 (石器・鍛冶関連遺物) .....		25

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島地域振興局農林水産部農村整備課（以下、「農整課」）は、「畑地帯総合整備事業（担い手支援型）〈吉利地区〉」を計画した。当該事業計画区域には周知の遺跡である「垂口遺跡」が存在するため、鹿児島県教育委員会文化財課ならびに日置市教育委員会社会教育課（以下、「社会教育課」）は、平成23年度分布調査を実施した。遺物の採集状況から、遺跡面積 450,000㎡のうち 340,000㎡が事業対象となることが判明した。社会教育課では平成24年に確認調査を行い、80カ所のトレンチのうち2カ所で遺物が出土した。この結果を踏まえて農整課と社会教育課で協議し、遺物包含層が確認できた2つのトレンチ周辺について、現状保存するとの見解で一致した。さらに平成29年に追加の確認調査を行ったところ、トレンチ12カ所中1カ所で遺物が出土した。これにより、当該事業計画区域に合計3カ所の埋蔵文化財保存区域を設定することが決定した。

平成30年、農整課より再協議の申し出があった。当初の設計に変更が生じ、3つの保存区域のうち1カ所については切土にしたいとの内容であった。当該地区では、就農者の圃場整備に対する要望が強いことから、記録保存のため本調査を実施することとなった。

### 第2節 調査の組織

起因事業主体	鹿児島地域振興局農林水産部			
調査主体	日置市教育委員会			
調査責任者	日置市教育委員会	教 育 長	奥 善一	
調査事務担当	日置市教育委員会	事 務 局 長	松田 龍次	
	〃	社会教育課長	梅北 浩一	
	〃	社会教育課長補佐	堀之内洋久	
	〃	文化係長	東 進一	
	〃	主 査	瀧川 哲哉	
調査担当	日置市教育委員会		西久保淳美	
	株式会社九州文化財総合研究所		大谷 伸宏	
	〃		権藤奈緒美	
	〃		野田 千輝	
調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課		中村 和美	
発掘作業員	有馬孝之 石田万里子 伊野辰夫 岡野朋理 川路幸一 加治木健一 川畑ケイ子 児玉 剛 児玉栄一郎 白坂孝昭 田中真由美 中馬美子 永田信行 中村由美子 西園 香 二俣ヒロ子			
整理作業員	永井美香 鍋嶋千恵子 菅 美加 上杉里枝子 高井光子 藤原リエ 上木理恵 安部明美			

### 第3節 調査の概要

本調査は令和元年10月2日から11月29日まで行われた。期間中、遺物包含層が西側へ延びることが推測されたため、農整課と協議し、調査区を拡張することになった。

調査区全体に10m四方のグリッドを設定した。拡張区も含め、最も北側から1、2とし、西から東へA、B、Cとしている。当初から予定されていた調査区はB1・2区、C1・2区であり、拡張区はA1・2区に相当する。

遺物は、縄文時代後・晩期の土器、古墳時代の土器、中世土師器、所属年代は不明だが石鏃、敲石、輪羽口、鉄滓等が出土している。柱穴と考えられる遺構が検出されたが、時代は不明である。

整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後12月3日より実施し、翌年3月に調査報告書を刊行した。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

垂口遺跡は、鹿児島県日置市日吉町吉利に所在する。

日置市は鹿児島県西部である薩摩半島のほぼ中央に位置し、東は鹿児島市、北はいちき串木野市と薩摩川内市、南は南さつま市に接している。西は東シナ海に面し、海岸線は日本三大砂丘の一つである吹上砂丘が発達している。薩摩半島は標高 300～400mの細長い南薩山地が東西を分けており、市の東部はこの山地が占めている。したがって、東から西へと下って東シナ海に至る東高西低の地勢である。

本遺跡の所在する日吉地域は、日置市のおよそ中央部に位置する。東部は標高約 300mの山地となっていて、その麓から低いシラス台地が広がり、西部は吹上砂丘と東シナ海に望む。集落は主に、発達した河岸段丘上に立地している。

垂口遺跡は、ほぼ東西に延びる標高約60mのシラス台地上にあり、西に東シナ海が一望できる。この台地には細い谷が入り込んでおり、今回調査地の北側も一段低い谷地形となっている。遺跡一帯は、台地を段状に区画した畑地で、果樹畑や芋畑、牧草場が広がっている。

### 第2節 歴史的環境

日吉地域で周知されている埋蔵文化財包蔵地は、現在57遺跡である。ただし、本格的な発掘調査が報告されているのは原口遺跡（H12年）、吉利古城遺跡（H17年）のみである。ここでは、垂口遺跡の所在する吉利地区周辺と、隣接する吹上地域永吉地区について記載した。

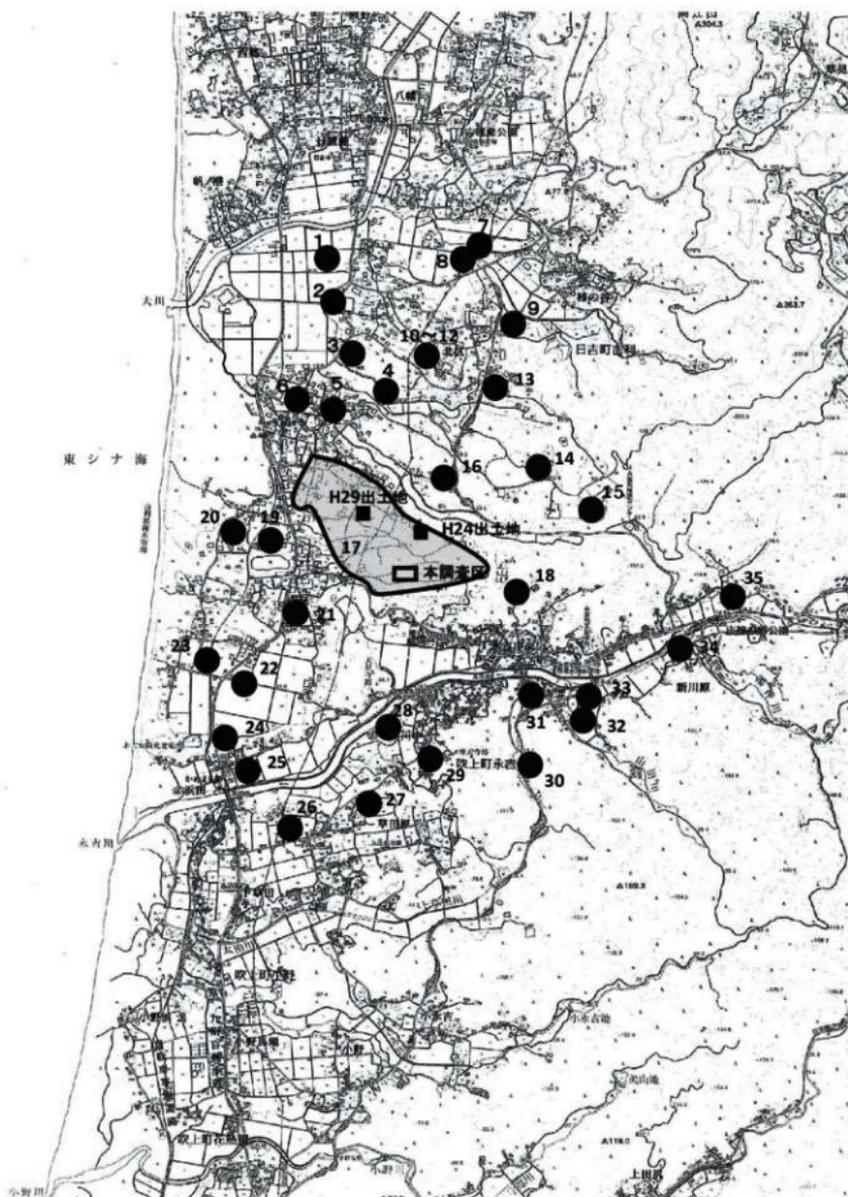
**旧石器時代** 吉利古城遺跡でナイフ形石器、台形石器、細石刃等が出土している。市内の旧石器時代遺跡は13カ所であるが、日吉地域で確認されているのはこの1遺跡のみである。

**縄文時代** 原口遺跡と吉利古城遺跡、垂口遺跡（確認調査）で早期の土器が出土している。前期については、永吉川下流の大園遺跡では深浦式土器が出土した。中期・後期の遺物は吉利地区では確認されず、永吉地区の笑童子遺跡、瀬戸遺跡で報告されている。晩期は瀬戸口遺跡・原口遺跡〔吉利地区〕、瀬戸遺跡〔永吉地区〕である。笑童子遺跡では縄文前期から後期、瀬戸遺跡では縄文前期から弥生時代までの遺物が出土しており、長い期間生活拠点とされたようである。このほか、詳細は把握されていないが、5遺跡が縄文時代相当とされており、分布範囲の広がりが窺える。

**弥生時代** 縄文時代と比較して遺跡数は少ない。大川下流域の微高地に立地する六ツ坪遺跡では、竪穴建物跡1基と土坑2基が検出された。原口遺跡では前期の土器、市坪遺跡では後期後葉の遺物が確認されている。

**古墳時代** 縄文時代に次いで遺跡数が多い。六ツ坪遺跡、原口遺跡で、それぞれ竪穴建物跡1基が検出されている。吉利古城遺跡では、埴形土器の埋納土坑が検出された。永吉川下流域では、ほとんどの台地で、古墳時代の土器が採集されるとの報告がある。須恵器が大量に出土した大園遺跡、戦前から多量の土器が出土したとされる塩屋遺跡などが、集落跡と考えられている。

**古代・中世** 六ツ坪遺跡では、掘立柱建物跡・越州窯青磁・焼塩土器と特殊な遺物が出土している。永吉川下流域にも、古墳時代から古代・中世を通じて存続した集落跡が知られている。また、中世の遺跡には、山城も含めて低地や低台地に立地するものも増え、西方への展開が顕著となる。



第1図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	六ッ坪	日吉町吉利	平地	縄文(早)、弥生～平安	土器(高/神式、弥生土器、成川式)、石器、土師器、須恵器など	平成7年確認調査
2	野崎城跡	日吉町吉利	台地	中世		『鹿児島県の中世城跡誌』、渋谷氏家所
3	春日城跡	日吉町日置	丘陵	南北朝～近世		『鹿児島県の中世城跡誌』
4	勝手ヶ原跡	日吉町吉利	丘陵	中世		『鹿児島県の中世城跡誌』
5	南谷城跡	日吉町吉利	台地	近世(文禄年間)		吉利小跡地、『郷土誌』(上)、坂占重徳の後主跡
6	若松城跡	日吉町吉利	低地	中世(南北朝)		『郷土誌』(上)、若松良重原城
7	井尻	日吉町吉利	平地	古墳、奈良、平安		平成2年分布調査
8	瀬戸口	日吉町吉利	平地	縄文(晩期)、古墳、古代、中世	土器、土師器、須恵器ほか	平成4年確認調査
9	瀬口	日吉町吉利	台地	縄文(早、晩)、弥生、古代～中世	土器(新平式、上加田式、入来式、松木雷式、成川式)、石器など	平成13年本調査
10	勝雄寺跡	日吉町吉利	台地	近世(文禄4年)		吉利神社裏、小堀占より移遷(郷土誌』(上))
11	儒家政所	日吉町吉利	丘陵	中世		『鹿児島県の中世城跡誌』
12	吉利島津家初代の墓	日吉町吉利	台地			社寺跡
13	吉利古城	日吉町吉利	丘陵	旧石器、縄文(早)、古墳、古代、中世	台形石器、ナイフ形石器、細石器、土器、須恵器など	平成16年確認調査 平成17年本調査
14	源光堀	日吉町吉利	台地	縄文、古墳、古代	土器、土師器など	平成25年確認調査
15	大園堀	日吉町吉利	台地	縄文、古墳、古代		平成12年度分布調査
16	藪ヶ字都	日吉町吉利	台地	縄文		平成09年度分布調査
17	瀬口	日吉町吉利	台地	縄文(早期・晩期)古墳・中世		平成24年確認調査 本報告書
18	南郷城跡	吹上町永吉	台地	中世		『吹上郷土史』(中)
19	越場A	日吉町日置	台地	中世		平成23年度分布調査
20	越場B	日吉町日置	台地	中世		平成23年度分布調査
21	堀	日吉町吉利	丘陵	縄文		『日吉町郷土史』
22	本堀	日吉町吉利	台地	縄文、弥生、古墳、中世		平成23年度分布調査
23	今堀	日吉町吉利	台地	古墳、中世	弥生土器・土師器・須恵器	平成23年度分布調査
24	塩屋	吹上町永吉	扇状地	古墳	土器	『吹上郷土史』(上)
25	大園	吹上町永吉	低地	縄文(前期)、古墳、中世	土器、土師器、須恵器	昭和03年分布調査
26	三反島	吹上町永吉	台地	古墳～中世		平成26年度分布調査
27	西外園	吹上町永吉	台地	古墳～中世		平成26年度分布調査
28	車田	吹上町永吉	低地	古墳、中世		平成23年度分布調査
29	善介城跡	吹上町永吉	丘陵	中世		『吹上郷土史』(上)
30	寺迫	吹上町永吉	低地	古墳		平成元年度分布調査
31	舟倉	吹上町永吉	低地	古墳		平成元年度分布調査
32	高杉	吹上町永吉	低地	古墳		平成元年度分布調査
33	市坪	吹上町永吉	低地	弥生～古代	土器、石皿、磨製石斧、石鏃など	平成元年度分布調査
34	美置子	吹上町永吉	低地	縄文(前期～後期)、古代	土器、土師器	平成元年度分布調査
35	瀬戸	吹上町永吉	低台地	縄文(前期～弥生)	土器、磨製石斧、スクレーパー	分布調査

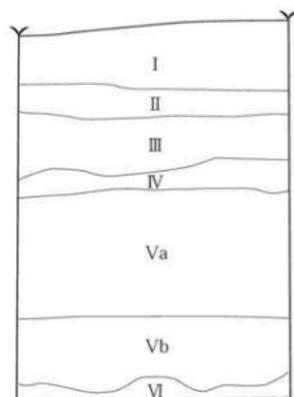
第1表 周辺遺跡一覧表

### 第三章 調査の方法と基本層序

垂口遺跡一帯は、平坦な畑作地となっているが、土層は東側から北西側へと下る地形となっている。調査区東部（C1・2区）については、大きく削平を受け、耕作土以下VI層（アカホヤ層）まで消失し、遺物は確認できない。後世の畑作によるものと考えられる。

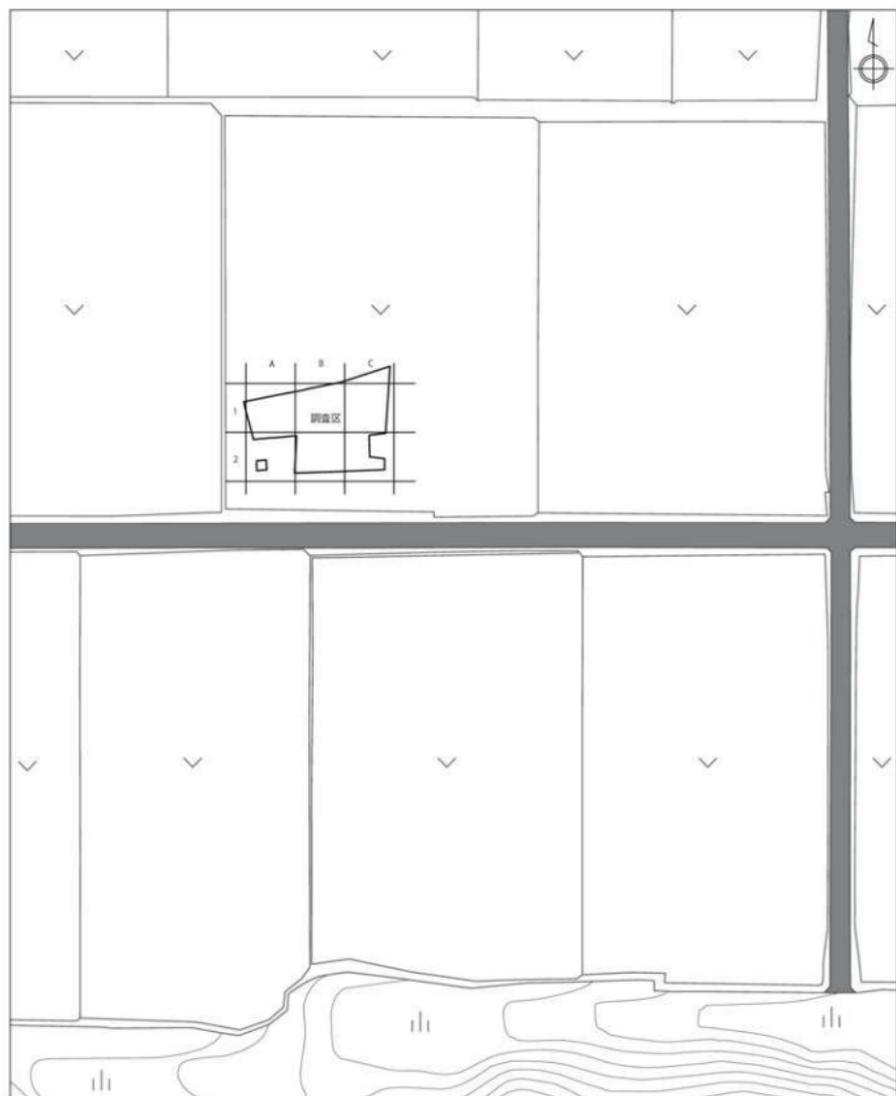
B1区西側に遺物が多く出土したため、当初調査区外であった箇所に5つのトレンチを設定した。遺物包含層であるVa層以下が確認できた範囲について、調査区を拡張し、A1・2区とした。

耕作の影響が比較的小さいA・B-1・2区の層位については、概ね安定しており、以下の通りとなる。

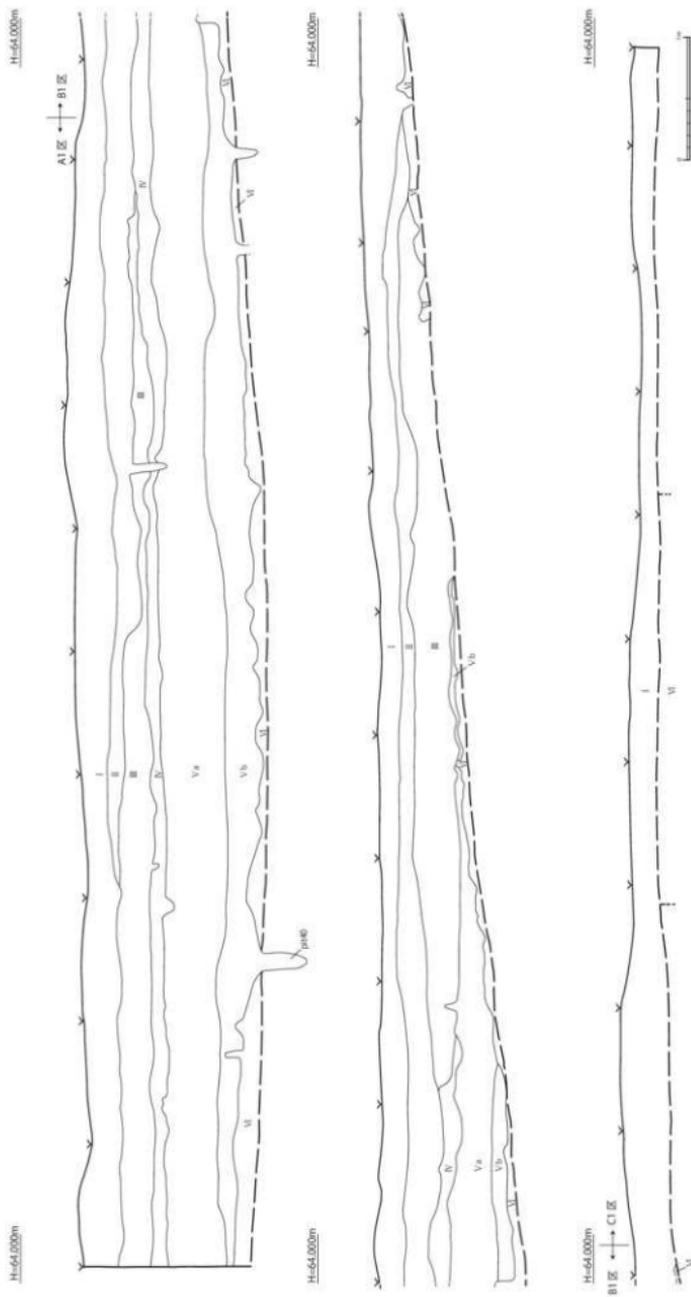


第2図 基本層序図 (S=1/20)

- I層：暗褐色土 表土
  - II層：暗褐色土 径1～5cm程のパミスを含む
  - III層：暗褐色土 旧耕作土
  - IV層：きめの細かい黒褐色土
  - Va層：黒色土 径0.5～1cm程の軽石を含む
  - Vb層：黒色土 軽石を含まず、下位から遺物が出土する
  - VI層：明黄褐色土（アカホヤ層） 所々にVb層の影響を受ける
- Va～Vb層では成川式土器が出土し、Vb層の下位～VI層では、縄文晩期の遺物が出土している。また、石鎌や敲石もVI層から出土している。遺構については、およそVa～Vb層で検出された。

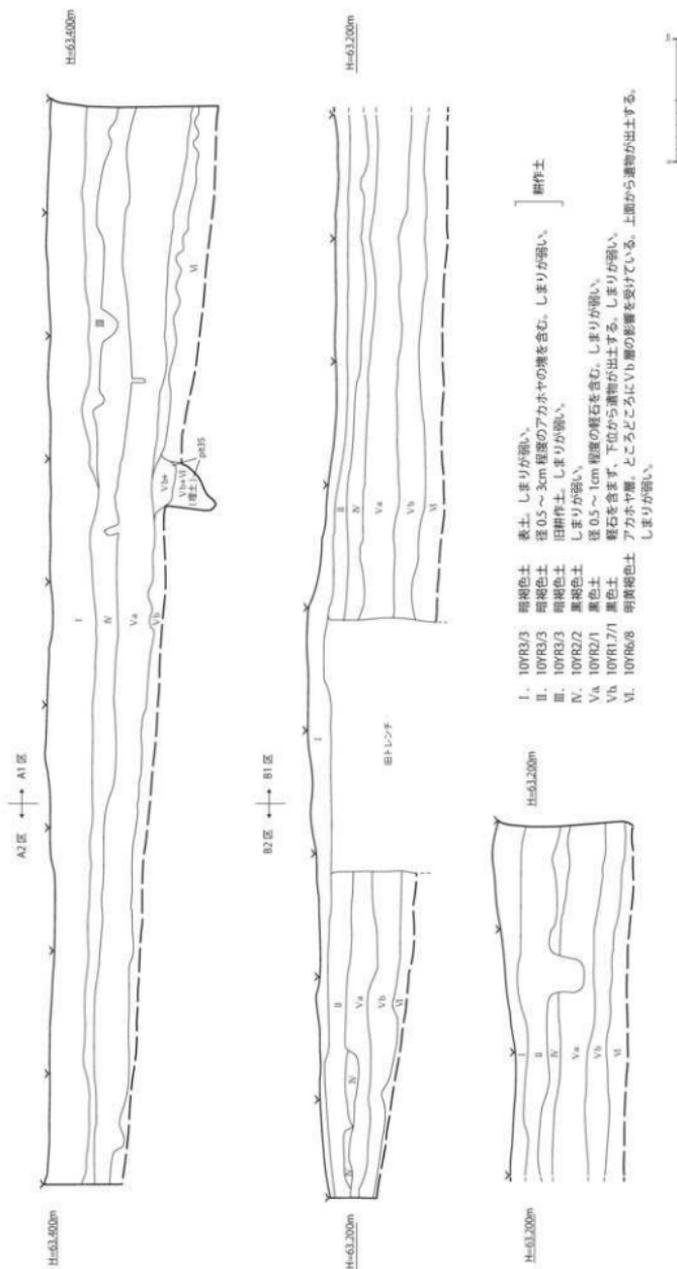


第3図 調査区配置図 (S=1/1,000)



第4図 北壁土層断面図 (S=1/40)

- |              |      |                               |             |       |  |
|--------------|------|-------------------------------|-------------|-------|--|
| I. 10VR3/3   | 暗褐色土 | しまりが強い、黄土                     | Va. 10VR2/1 | 黒色土   | 径 0.5 ~ 1cm 程度の軽石を含む、しまりが強い、               |
| II. 10VR3/3  | 暗褐色土 | 径 0.5 ~ 3cm 程度のバミスを含む、しまりが強い、 | Vb. 10VR1/7 | 黒色土   | 軽石を含まない、下位から遺物が出土する、しまりが強い、                |
| III. 10VR3/3 | 暗褐色土 | しまりが強い、旧耕作土                   | V. 10VR6/8  | 明黄褐色土 | アカホヤ層、ところどころに上層 (Vb層) の影響を帯びる、上面からは遺物が出ます、 |
| IV. 10VR2/2  | 黒褐色土 | しまりが強い、                       |             |       | しまりが強い、                                    |



第5図 西壁土層断面図 (S=1/40)

## 第IV章 調査の成果

調査の成果を、層ごとに報告する。

### VI層（第6・10・11図）

VI層検出面は、調査区の南東（標高 63.50m）から北西（62.00m）に向かって比高差 1.5mと緩やかに下っている。

VI層の検出精査の結果、遺構は確認されなかった。遺物は包含層より土器29点、石鏃2点、剥片1点、敲磨石1点ほか38点が出土した。土器は胴部片が多く、器形がはっきりするものは少なかった。今回、図示可能な遺物10点について記載した。

1は磨消縄文土器の胴部である。2～6はいずれも縄文晩期の精製土器である。2は深鉢の波状口縁部、3は浅鉢の口縁部、4は深鉢の口縁部、5・6は深鉢の胴部である。21・22は石鏃で、21が上牛鼻産安山岩、22は黒曜石と石材が異なる。28は頁岩製の二次加工剥片、30は安山岩製の敲磨石である。

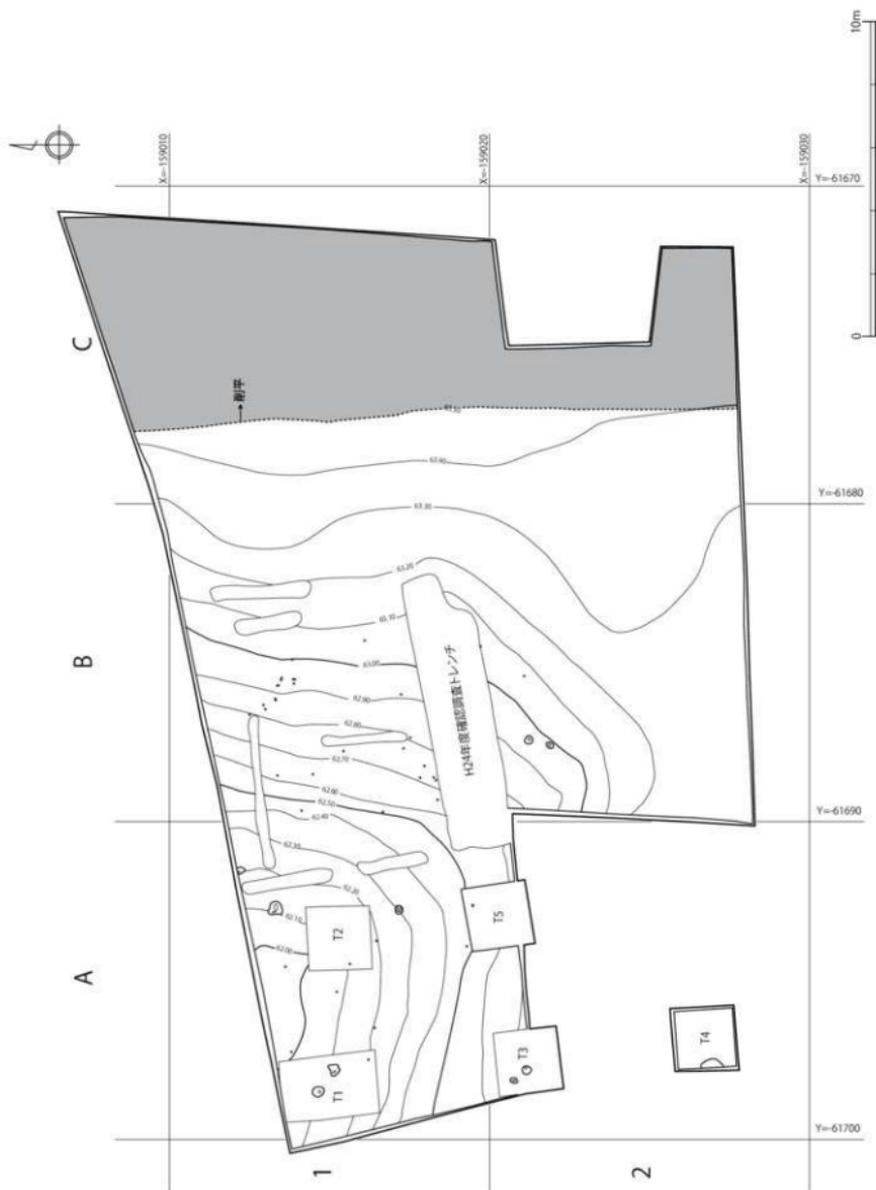
### V a・b層（第7・8・9図）

V a・b層を掘り下げる途中で、土坑5基、ピット49基がA1区に集中して確認された。そのほとんどはV b層での検出である。ただし、断面等よりV a層から掘り込んでいる可能性のものも幾つか見受けられた。また、遺構相互の関係性は把握できず、建物跡などの確認はできなかった。

全ての遺構から遺物は確認されなかったが、包含層から土器、石器、土師器、陶磁器等 580点が出土した。うち21点を報告する。7は甕の口縁部で、8・9は小型埴の口縁部、10～12は器種不明である。これら7～12は成川式土器で、10～12は笹貫式と思われる。13・14は土師器の口縁部、15・16は土師器皿の底部である。23は上牛鼻産安山岩製の石鏃、26・27は頁岩製のスクレーパーである。31・32は輪羽口片、33～38は鉄滓である。

### I～IV層（第10・11図）

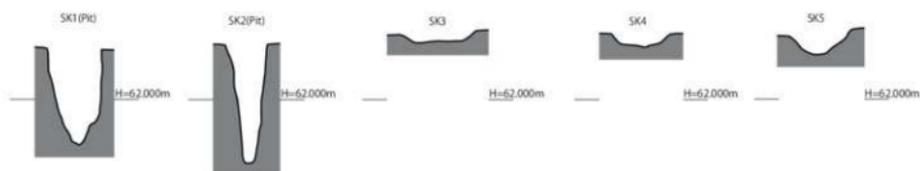
59点の遺物が出土した。うち9点を図化した。17は土師器皿の底部、18は陶器播鉢の底部、19・20は染付の碗である。24・25は黒曜石の石鏃で、25は腰岳産系である。36は鉄滓、39は鉄釘、40は鉄鏃である。



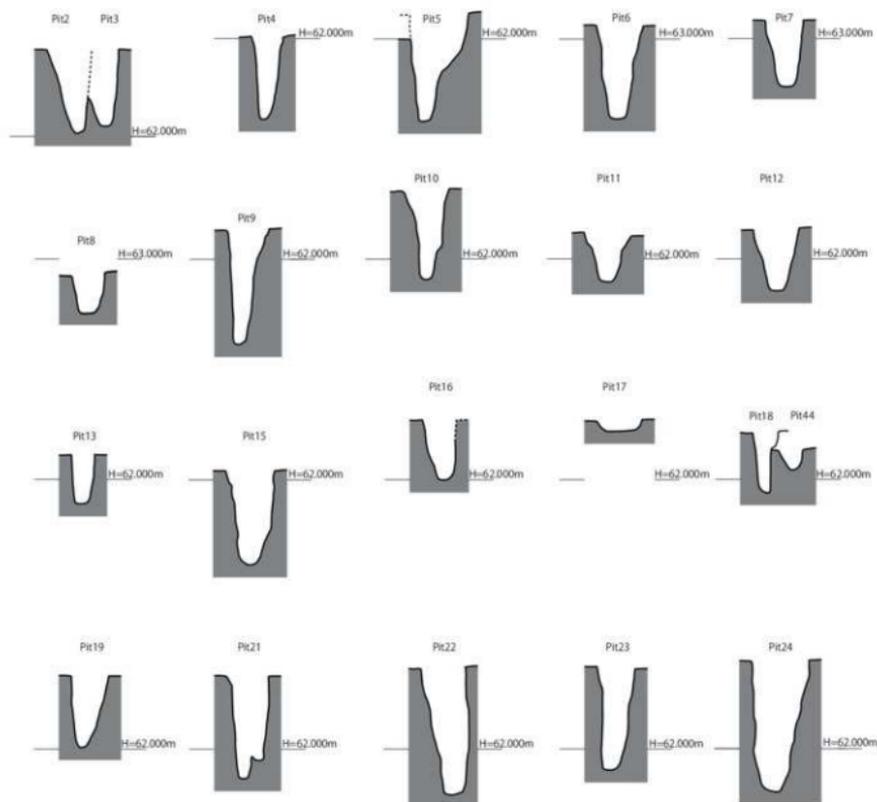
第6図 VI層遺物分布図 (S=1/150)



SK1 ~ SK5  
Pit2 ~ Pit24

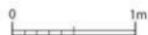
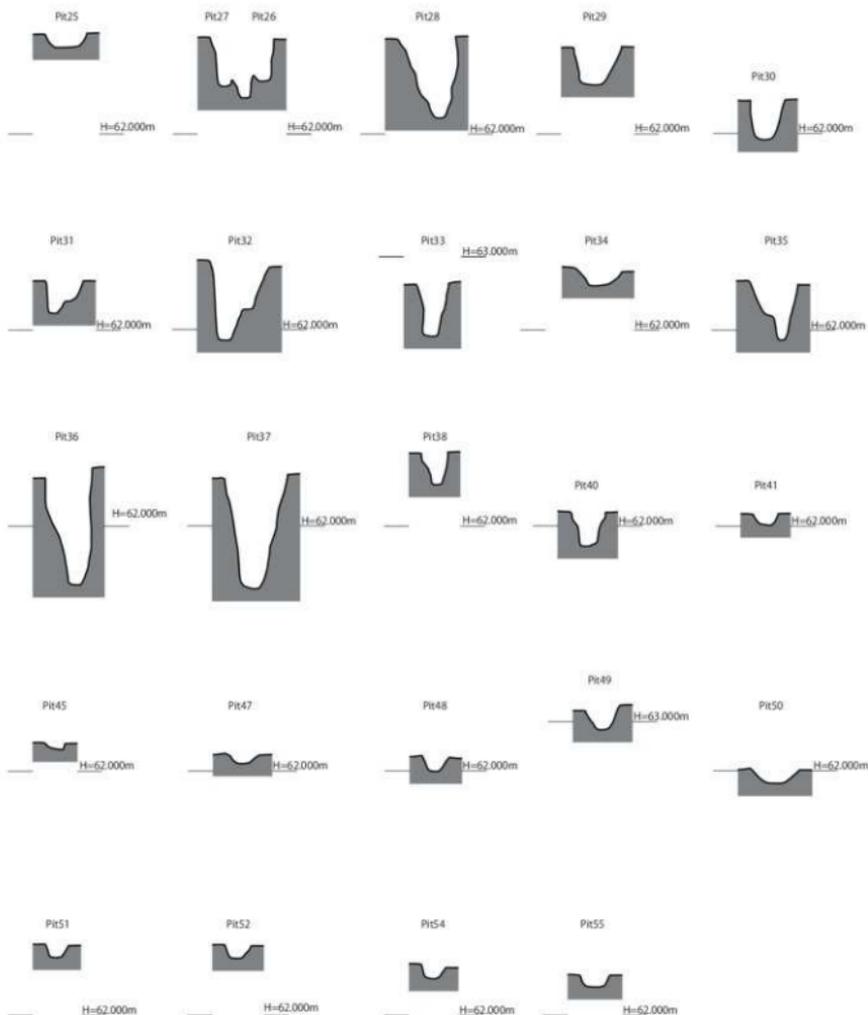


※SK1・2はPitのみ図示する。

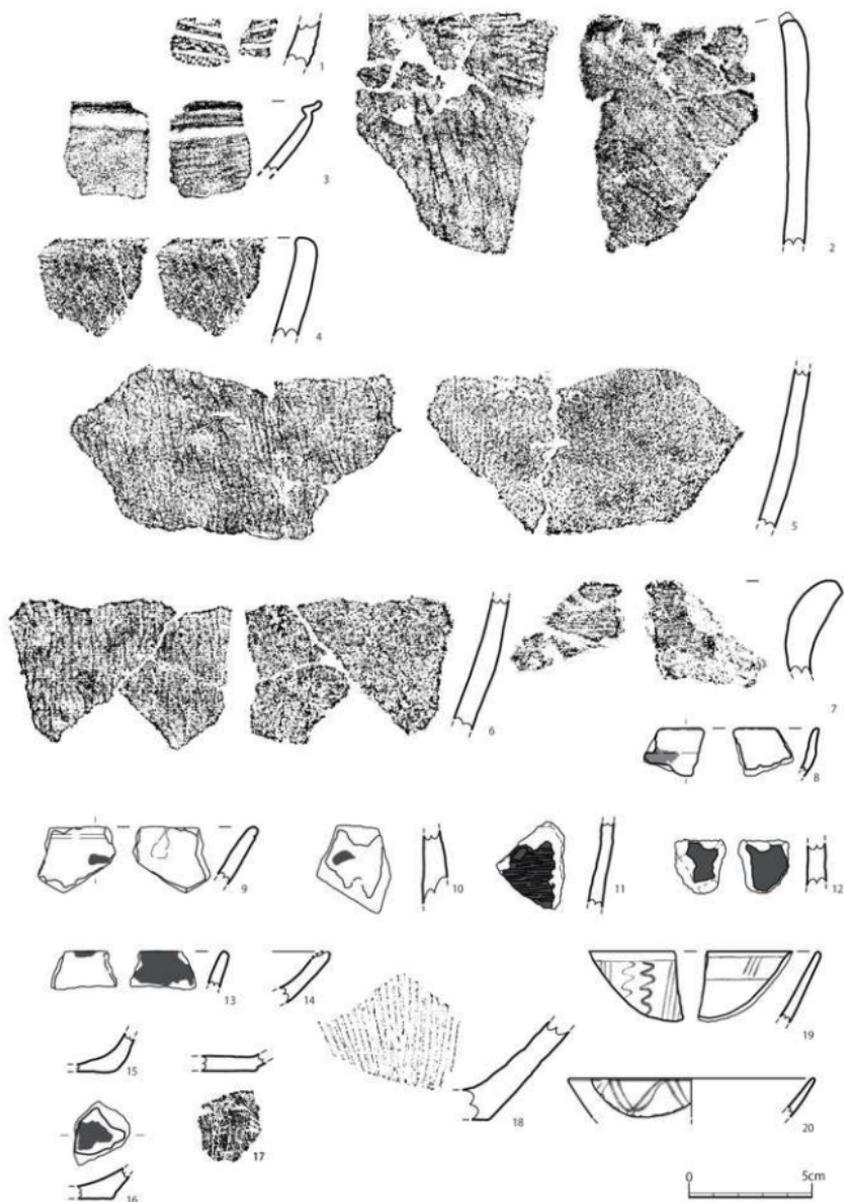


第8図 遺構断面図① (S=1/40)

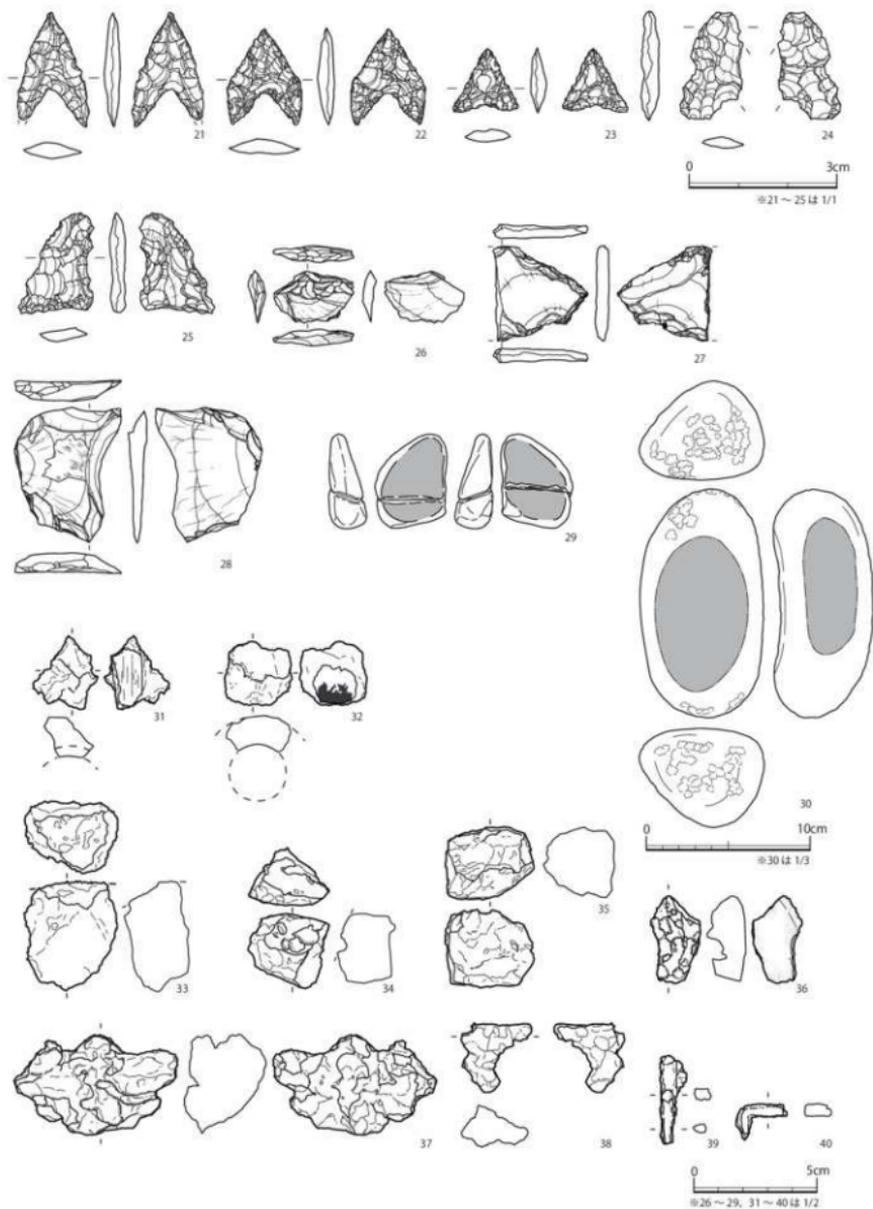
Pit25 ~ Pit55



第9図 遺構断面図② (S=1/40)



第10回 出土遺物実測図(土器・陶磁器)(S=1/2)



第11図 出土遺物実測図(石器・銀冶関連遺物)(S=1/1・1/2・1/3)

## 第V章 自然科学分析

森 将志・鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

### 1 はじめに

鹿児島県日置市に所在する垂口遺跡において、古環境を検討するためにプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺のイネ科植物相について検討した。

### 2 分析試料および方法

分析試料は、A1区の基本層序から採取された計11点である(表1)。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカールにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図版1に載せた。

### 3 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(表2)、分布図に示した(図1)。

11試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の8種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。

### 4 考察

縄文時代晩期とされるVI層(No10・11)では、ネザサ節型やササ族型、ヨシ属、キビ族、ウシクサ族などの機動細胞珪酸体が見られた。当時の試料採取地点周辺には、ネザサ節やササ属といったササ類や、キビ族やウシクサ族などのイネ科植物が生育していたと思われる。また、湿地的環境には抽水植物のヨシ属も生育していた

と考えられる。さらに、VI層(No10)ではイネ機動細胞珪酸体も産出している。試料採取地点周辺にはイネの葉身が何らかの形で存在していた可能性がある。

表1 分析試料一覧

試料No.	調査区	層位	時期	背景	備考		
1	2IKA1	I	中近世	黒褐色(10YR3/2)シルト			
2		II		黒褐色(10YR2/3)シルト			
3		III		黒褐色(10YR3/2)シルト			
4		IV		黒褐色(10YR3/2)シルト			
5		Va		黒色(10YR2/1)シルト			
6		古墳時代	Vb	黒色(10YR2/1)シルト			
9				黒色(5YR2/1)シルト			
7				Vb+	黒色(7.5YR2/1)シルト	P1(35)	
8				Vb+VI	黒色(5YR2/1)シルト		
10				VI	黒褐色(10YR2/3)シルト		
11					縄文時代晩期		褐色(10YR4.6)シルト

表2 試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
I	11,200	52,400	15,000	2,500	1,200	2,500	17,500	96,900	6,200
II	6,100	43,600	14,500	2,400	1,200	2,400	15,700	102,900	3,600
III	2,400	77,300	20,500	8,500	0	3,600	26,600	164,200	4,800
IV	4,900	95,800	8,500	9,700	0	1,200	24,300	139,500	12,100
Va⑤	5,300	180,800	21,300	18,600	1,300	4,000	30,600	241,900	19,900
Va⑥	5,700	153,400	10,900	20,100	1,400	12,900	28,700	283,800	25,800
Vb⑤	13,800	326,600	13,800	23,600	2,000	5,900	80,700	342,400	25,600
Vb+⑦	5,700	579,400	36,300	53,500	3,800	3,800	42,100	481,900	36,300
Vb+VI	4,100	308,600	29,000	22,800	0	0	64,200	236,100	33,100
VI⑩	1,900	124,100	18,800	13,200	3,800	0	43,200	265,100	30,100
VI⑪	0	31,300	14,700	0	1,800	0	9,200	84,700	12,900

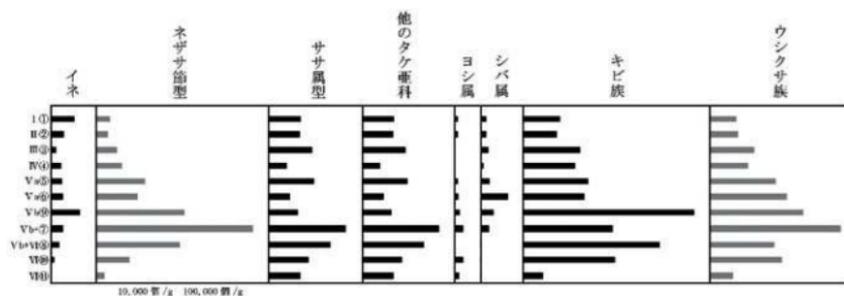


図1 重口遺跡における植物珪酸体分布図

古墳時代とされるV b層 (No.9)、V b + 層 (No.7)、V b + VI層 (No.8) においても、VI層 (No.10・11) で確認された分類群が産出しているが、珪酸体の産出量が多い傾向にある。V b + 層 (No.7) とV b + VI層 (No.8) は Pit35の埋土から採取された試料であるため、ピットにイネ科植物の葉身が堆積しやすかった可能性があるものの、その上位に重なるV b層 (No.9) から多くの機動細胞珪酸体が検出されるため、古墳時代の試料採取地点周辺には、ネザサ節型やササ属型、キビ族、ウシクサ族などのイネ科植物が繁茂していた可能性がある。また、V b層 (No.9)、V b + 層 (No.7)、V b + VI層 (No.8) においてもイネ機動細胞珪酸体の産出が確認でき、古墳時代にも試料採取地点周辺にイネが存在していたと思われる。

中近世とされるV a層 (No.6) では、下位層と同じくネザサ節型やササ属型、キビ族、ウシクサ族などの機動細胞珪酸体が産出しており、特にシバ属機動細胞珪酸体の産出が目立つ。中近世において、試料採取地点周辺には特にシバ属が分布を広げていた可能性がある。

V a層 (No.6) 以上の層になると、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族の産出量は、上位層に向かって減少している。一方で、イネ機動細胞珪酸体は上位層に向かって産出量が増加する傾向にあり、試料採取地点周辺のイネ科植物の様相は、時期を経るにしたがって変化していったと考えられる。例えば、自然的な要因でネザサ節型やキビ族、ウシクサ族が減少した可能性や、試料採取地点の周辺においてネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などが生育していた明るい開けた場所が開墾され、水田が増えるとともにイネ機動細胞珪酸体の供給が増えた可能性、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族が生育していた場所に人が住むようになり、それに伴って試料採取地点の周辺に稲藁が持ち込まれる機会が多くなった可能性など、いくつかの状況が推測され、植物珪酸体組成の層的变化の要因については、考古学的な成果とともに検討する必要がある。

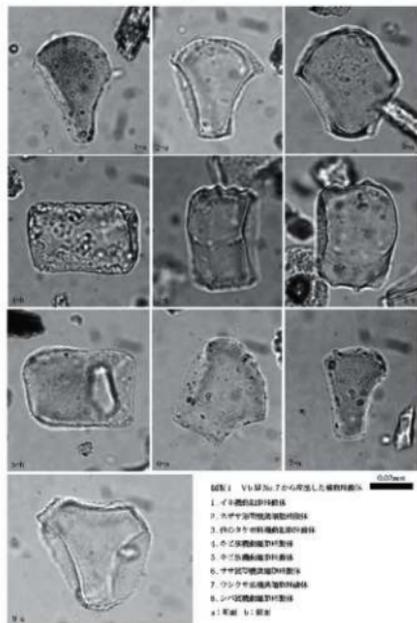


図2 V b層No.7から採取した植物珪酸体

1. イネ機動細胞珪酸体
2. ネザサ節型機動細胞珪酸体
3. ササ属機動細胞珪酸体
4. シバ属機動細胞珪酸体
5. ヨシ属機動細胞珪酸体
6. キビ族機動細胞珪酸体
7. ウシクサ族機動細胞珪酸体
8. その他機動細胞珪酸体

×1 縦横 ×1 縦横

## 第Ⅵ章 まとめ

今回の調査結果について、概括する。

### 縄文時代

V b層下部からⅥ層（アカホヤ二次堆積層）上位にかけて、縄文晩期土器が出土した。1点だけ磨消縄文土器が出土したが、本遺跡においても、周辺遺跡からも、縄文後期の遺物は初見である。Ⅵ層上面は、調査区東側から北西にかけて緩やかに下る地形であるが、畑の整備などにより、高所である東半部はⅥ層下部までが削平された状態であった。土器は破片ながら摩耗は少なく、調査区西部に分布が片寄る。数量から見ても、遺跡本来の主要域は、南東方面に立地していたのではないかと考える。

石器については、出土層位にバラツキはあるものの、形状・石材等から、概ねこの時期のものと考えられる。また調査面積に比べ、石鏃の数が多く印象を受けた。プラントオパール分析で示されたイネ科植物の存在と併せて、遺跡の当時の生業を考える上で重要な特徴と言えよう。

### 古墳時代

A 1区V aからV b層にかけて成川式土器が出土した。出土箇所が限定されること、確認できた器種が甕と小型埴であること、赤彩のものが割合多い、といった特徴が挙げられる。小破片であるため断定はできないが、儀礼的な空間であった可能性も否めない。

### その他

A 1区ではV a・b層が比較的厚く堆積し、同層を掘り込んだピット群が検出された。遺構内の遺物は皆無で、建物としての構造も捉えられなかった。北側の谷へ下る地形に位置することから、柵や土留めといったものも想定される。

主にV a層で、鍛冶関連遺物がまとまって出土した。同層は、中・近世の遺物も混在することから、正確な時代は不明である。

これらの遺構・遺物とも情報が少なく、今後も検討が必要であるが、長い時代続いた遺跡の変容を知る良好な資料となり得る。

第2表 遺物観察表

## 土器

図版番号	遺物番号	区	層	器種	部位	法量(cm)				色調内/外 釉調	調整・裝飾			胎土			備考
						口徑/ 底大長	最高 最大幅	高さ/ 最大深	孔径/ 重量(g)		内面	外面	角閃石	長石	石英	その他	
10	B2	VI	不明	胴部	-	1.9	α	-	褐色/茶褐色	ミガキ	縄文	少	少	-	-	麻溝縄文土器	
	B2	VI	深鉢	口縁部	-	8.3	9.5	-	灰褐色/灰褐色/ 黒褐色	ナデ	ミガキ	多	多	多	縄文晩期 精製土器		
	A1	VI	浅鉢	口縁部	-	2.5	α	-	黒褐色/黒褐色	強いミガキ	強いミガキ	-	多	多	縄文晩期 精製土器		
	B1	VI	深鉢	口縁部	-	3.9	α	-	灰褐色/灰褐色	ナデ	ミガキ	多	多	-	縄文晩期 精製土器		
	B1	VI	深鉢	胴部	-	12.3	α	-	灰褐色/灰褐色	ナデ	ミガキ	少	多	多	縄文晩期 精製土器		
	B1	VI	深鉢	胴部	-	8.5	α	-	灰褐色/黒褐色	ナデ	ミガキ	少	多	多	縄文晩期 精製土器		
	A1	Va	深鉢	口縁部	-	3.8	α	-	灰黄褐色/灰黄 褐色	ヨコナデ 期ヶ ズリ	ヨコナデ	少	多	多	成川式土器		
	A1	Va	壺	口縁部	-	2.0	α	-	にふい橙色/に ふい橙色	ナデ	ナデ	多	多	-	成川式土器		
	A1	Va	壺	口縁部	-	2.6	α	-	褐色/黒褐色	3ナデ 工具ナ デナデ	3ナデナデ 赤 彩	少	少	-	成川式土器		
	A1	Va	不明	胴部	-	2.1	α	-	灰色/淡黄色	ナデ	ナデ赤彩	少	少	-	成川式土器(登真式)		
	A1	Vb	不明	不明	-	2.7	α	-	淡黒褐色/赤褐 色	ナデ	ナデ赤彩ミガ キ	少	多	多	成川式土器(登真式)		
	A1	Va	不明	不明	-	1.9	α	-	黄褐色/暗赤褐 色	ナデ赤彩	ナデ赤彩	多	多	-	成川式土器(登真式)		
	A1	Vb	土師皿	口縁部	-	1.5	α	-	淡橙褐色/淡黄 橙褐色	ヨコナデ赤彩	ヨコナデ	多	多	少	中世		
	B1	Va	土師皿	口縁部	-	2.1	α	-	淡黄色/淡黄色	ナデ	ナデ	少	少	-	中世		
	A1	Va	土師皿	底部	-	1.6	α	-	灰白色/灰白色	磨滅	磨滅	-	少	少	中世		
	A1	Va	土師皿	底部	-	1.2	α	-	淡黄褐色/淡黄 褐色	ナデ赤彩	回転ナデ 回転 水切り	多	多	多	中世		
	A1	I	土師皿	底部	-	0.7	α	-	淡黄褐色/淡黄 褐色	ナデ	ナデ系切り	-	多	少	中世		
	-	I	陶器 織鉢	底部	-	4.0	α	-	赤褐色/灰白色/ 赤褐色	織目	回転ナデナデ	-	-	少	近世		
	-	I	染付碗	口縁部	-	2.9	α	-	胎土灰白色 釉 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	胎土 織物	よろけ縄文	
	B1	I	染付碗	口縁部	(10.0)	1.6	α	-	胎土灰白色 釉 透明釉	回転ナデ	回転ナデ	-	-	-	胎土 織物	二重刷目文	

## 石器

図版番号	遺物番号	区	層	種類	石材	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
11	21	B1	VI	石鏃	上牛鼻産 安山岩	2.3	1.4	0.35	0.7	表面風化顯著 胴部欠損
	22	A1	VI	石鏃	黒曜石	1.95	1.5	0.3	0.7	
	23	A1	Va	石鏃	上牛鼻産 安山岩	1.3	1.3	0.3	0.3	不純物を含む
	24	A1	I	石鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.8	胴部大きく欠損 不純物を含む
	25	A1.2	I	石鏃	櫻岳産 黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.7	未成品
	26	B1	Va	スクレーパー	頁岩	3.2	2.1	0.7	3.2	一部磨蝕有
	27	B1	Va	スクレーパー	頁岩	3.8	3.8	0.5	8.4	
	28	B1	VI	製片	頁岩	3.5	3.2	0.9	16.5	二次加工有
	29	A1	Va	有溝石製品	砂岩	3.8	3.0	1.4	21.7	用途不明
	30	B1	VI	磨石	安山岩	14.0	7.5	5.7	696.3	

## 鍛冶関連

図版番号	遺物番号	区	層	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁力 反応	備考
11	31	A1	Vb	鑄削口	3.0	2.6	1.6	7.5	△	鉄滓附着
	32	A1	Va	鑄削口	2.6	2.7	1.2	7.5	△	内面に赤色付着
	33	B1	Va	鉄滓	4.5	3.8	2.5	43.0	×	伊内滓
	34	A1	Va	鉄滓	3.1	3.3	2.1	28.7	×	流動滓
	35	A1	Va	鉄滓	3.0	3.6	2.9	58.3	×	流動滓
	36	-	I	鉄滓	3.6	2.0	1.5	13.6	×	流動滓
	37	A1	Va	鉄滓	4.1	6.6	3.3	49.8	○	流動滓鉄錆付着
	38	A1	Va	鉄滓	2.8	2.3	1.7	7.7	×	流動滓鉄錆付着
	39	-	I	釘	3.6	1.1	0.5	2.8	△	
	40	A1	I	釘	2.1	1.0	0.5	3.4	△	



調査区全景



北壁土層断面A1



北壁土層断面B・C-1



西壁土層断面B1



西壁土層断面A1



B1・2区 VI層 遺物出土状況 南より



B・C-1・2区 VI層 完掘状況 北東より



A1・2区 Va層 遺物出土状況 南西より



A1・2区 Vb層 遺構検出状況 南より



A1区 Va・b層 完掘状況 南より



A1区 VI層 完掘状況 南より



A1区 VI層 No.3出土状況 南より



B1区 VI層 No.30 出土状況 西より



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31表



31裏



32表



32裏



33



34



37

## 報告書抄録

ふりがな	たれくちいせき							
書名	垂口遺跡							
副書名	畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	日置市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	4							
編著者名	西久保淳美・大谷伸宏・権藤奈緒美・野田千輝							
編集機関	日置市教育委員会							
所在地	〒899-2592 鹿児島県日置市伊集院町郡1丁目100番地					ℓn099-248-9432		
発行年月日	西暦2020年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
垂口遺跡	鹿児島県日置市 日吉町吉利字垂口	46216	216-209	31° 33′ 51″	130° 21′ 00″	20190904 ～ 20191129	408㎡	畑地帯総合整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記		
垂口	遺物散布地	縄文 後期・晩期		土器（磨消縄文土器・黒川式） 石鏝、スクレイパー				
		古墳		成川式土器（従貫式）				
		中世・近世		土師器、陶磁器				
		不明	土坑5基、ピット49基	鍛冶関連遺物				
要約	<p>垂口遺跡では、以前行った確認調査で縄文早期、古墳時代、中世の複合遺跡であることが把握されていた。今回の調査では、アカホヤ層直上で縄文晩期の土器が出土した。また、それらに混じて1点のみであるが、磨消縄文土器が出土した。吉利地区周辺の遺跡で、縄文時代後期の遺物が確認されるのは今回が初めてである。</p> <p>また、所属年代や建物構造ははっきりしないものの、限られた地点でピット群が検出された。同じく時代不詳ではあるが、鍛冶関連遺物がまとまって出土した。調査地点の地形的特徴も併せて、垂口遺跡の性格を探るうえで良好な資料を得ることができた。</p>							

日置市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

## 垂口遺跡

畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2020年3月

発行者 日置市教育委員会  
〒899-2592  
鹿児島県日置市伊集院町郡1丁目100番地  
TEL.099-248-9432

印刷所 佐伯印刷株式会社  
〒870-0844  
大分県大分市古国府1155-1  
TEL.097-543-1211

